論文審査結果の要旨

本論文については、博士論文公開審査会（令和元年８月９日、於文学部会議室）において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

①『水滸伝』容與堂本諸本の関係について
②北静廬の書籍入手方法について
③『水滸画伝』における「評閲百回」の利用方法について
④馬琴と『通俗忠義水滸伝』の関係について
⑤栗山孝庵について
⑥金聖歎の「背面鋪粉法」に関する馬琴の理解について
⑦馬琴の善悪に関する態度について
⑧犬坂毛野の対牛楼物語と武松の鴛鴦楼物語の関係について
⑨湯島・鈴ヶ森物語と『水滸伝』の関係について

以上の論点について、質疑を行い、基本的に適切な認識を有していることが確認された。

本論文は、曲亭馬琴の『水滸伝』受容について、『新編水滸画伝』と『南総里見八犬伝』を中心に論じるものである。この問題は従来からその重要性を認識されてはきたが、『水滸伝』のテキスト問題が複雑を極めることもあり、過去の研究は十分なものとはいえなかった。本論文は、まず研究の前提として現存する『水滸伝』諸版本のすべてをあげ、その関係を可能な限り明らかにしている。これは中国文学の研究としても高く評価しうるものである。更に、筆者自身が発見に貢献した石渠閣補刻本『水滸伝』そのものが、馬琴が目にしていた北静廬蔵本である可能性が高いことを明らかにしたことも大きな成果と言ってよい。その上で、『水滸画伝』と『水滸伝』諸版本を精査することにより馬琴が依拠していたテキストを明らかにし、馬琴が所蔵していた『水滸伝』和刻本旧蔵者解明にまで至る過程は、綿密な作業に基づく実証的なものであり、そこから得られる結論は、馬琴の研究に資するのみならず、当時における唐話（中国語）受容の実態を明らかにする上でも大きな意義を持つものである。

『八犬伝』と『水滸伝』の関係に関してもやはり多くの先行研究があるが、いずれも断片的なものであり、総合的にその全体像を明らかにすることを試みた例はない。その点で、本論文における『八犬伝』全体にわたる馬琴の『水滸伝』利用方法の分析は、『八犬伝』のみならず、馬琴の創作手法を解明する上でも重要な意味を持ち、馬琴の影響力の大きさを考慮すれば、近世から近代に至る日本文学研究にも大きく貢献するものと言ってよい。

以上のように、本論文は画期的な内容を持ち、研究史上極めて重要な意義を持つものであり、文学研究科の定める博士学位論文審査における評価基準を満たしているものと判断される。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。